佳作

「私の作品」だから

東京都　東京都立世田谷総合高等学校二年　下村　真唯

「夏の大会の台本は、私が書きたいです。」

高校一年の六月、私は先輩にそう言った。この学校の演劇部は生徒が台本を書いている、そうパンフレットに書いてあったから、私は自分の台本で舞台に立ちたくてこの高校を選んだ。毎年六月に行われる新人選を終えただけで、なんの演劇経験もない私が、当時台本作家を担当していた先輩に突如放った言葉。もちろん、先輩はあまり良い反応はしなかったが、演技の指導をするために来てくださる外部指導員の方には、原案の時点でとても褒めていただけたものであり、私のとある夢がこもった作品でもあった。だから私は、たとえ先輩が相手でも諦めたくなかった。

先輩が書いている台本のジャンルは主に現代劇であり、学生たちの日常を描いた現実的な作品だった。大道具も小道具も衣装もいらない、練習にだけ没頭できる作品。それは予算のない私たち学生にとってはぴったりなものだった。けれども、私が頭の中で描いていた演劇部とは違って見えた。よくアニメや漫画なんかで目にする演劇部は、ドレスにお城、大がかりな舞台装飾。そんなファンタジーを描いたものが多い。完全にそのイメージを持っていた私が書く台本は、もちろん異世界ファンタジーだった。それは、小学生のとき、ライトノベルに感化されて小説として書いていたものを台本用にアレンジしたもので、その作品に高校生になっても自信を持っていた私はどうしても何かしらの形で人目に触れさせたいという願いを抱えていた。他の部員たちに話せば、私も好き、このキャラが好き、と皆私が書いた作品で盛り上がってくれていた。部員も外部指導員の方も良いと言ってくれている。しかし、先輩はやはり首を縦には振ってくれなかった。それはそうだろう、作品の世界観はスチームパンクであり、内容も、現代を生きる誰にも愛されない少女がある日事故に遭い、生死の境界にある街に訪れてしまう。そこで出会った青年に影響され、彼の抱える切ない過去と死を望んでいる現状を変えるために行動するうちに少女は自然と前を向いていく、という派手な衣装や舞台装置が必須となってくる作品なのだから、先輩が渋るのもうなずけた。しかし、私の趣味はアンティーク風な小物を集めること。劇に使えそうな衣装も小道具も、私は部員たちに貸せるほどの量を持っていた。その旨を伝えたら、先輩は言った。

「経験のない君が台本を書けるとは思えない。」

と。先輩は最初から道具のことで渋っていたのではなく、私の能力を心配していた。それはもっともなことであり、ましてや私のように原案が完全なファンタジー小説なことも初めてだろう。私が何も言い返せずにいると、

「次の台本も私が書く。」

と言葉が飛んできた。諦めなくちゃいけないのかな、そう思ったときだった。部員が全員、先輩の名前を呼んだ。そして、こう言ってくれた。

「私たちは次の大会にこの子のこの台本で出たい。この台本じゃないなら、大会は出たくない。」

その一言で、私がどんなに嬉しくて、感動したか、きっと皆は知らない。自分たちに都合がいいのは明らかに私の台本じゃない。でも、この作品に推しができたから、このシーンが好きだから、だからやりたい、と言ってくれた。私はそれだけで泣くほど嬉しかった。

大会当日、会場内の楽屋にはスチームパンクの衣装に身を包み、うきうきとした部員たちの姿があった。もちろん私も役者として出演した。公演が始まって終わるまでの一時間はとても早く感じられた。公演は大成功を収め、来場者や他校の役者たちから寄せられた感想シートには、役者の演技を褒める言葉の他にシーンやセリフ、世界観、キャラ、衣装を褒める言葉が並んだ。すごく嬉しかった。先輩も音響を手伝ってくれて、全てが合わさって素晴らしい作品となった。

それから私は先輩の引退を機に台本作家を務めることになり、今日に至るまで二作品を書き上げた。一つ目は歴史が好きな主人公がタイムスリップして若くして亡くなる推しを助ける現代ファンタジー。二つ目は大正時代を生きる主人公が神隠しで古代中国をモデルとする冥界に迷い込む和風中華ファンタジー。これらの作品のファンになってくれた人たちが、今の部活の後輩である。私は三年生の夏に部活を引退するまで、私の作品を愛してくれる同期と後輩たちと一緒に新たな目標に向かって走っていきたい。